

ムラ体質 政府便乗

04平和考

イラクで見えた日本

上

その夜、彼の自宅には、軽率な行動」を批判する電話が鳴りやまなかった。名乗りもせず一方的に切れる電話。落ち込む家族に突き刺さる言葉。静まり返った家の中に、追い打ちをかけるような冷たいベルが響いた。

イラクで拘束・殺害された香田証生さん(当時24歳)が育った福岡県直方市の自宅。事件が発覚した10月27日には、こうした電話が70件かかってきた。家族は相手の電話番号が分かる装置を急ぎ、取り付けたとい

き、言葉をつないだ。 「市民が危険な状況なのに、手をこまぬいているわけにはいかない」。職員たちは、聞く耳を持たない相手に何度も繰り返した。あの職員は深いため息をつき、言葉をつないだ。

傷名中匿された返繰り返

「身近でない人の痛みを共有する感覚が、乏しいのだから……」

香田さんは、高校卒業後、職を転々としながら、海外での支援活動に関心を持っていた。イラク入り直前まで「どうしたら世界は平和になるのか」などと話していたという。だが、明確な

だが、「八自己責任」とは何か」の著書がある東京経済大の桜井哲夫教授は、その背景に「ムラ社会」の体質をみる。

「近現代国家では、どんな状況でも政府は国民を守る責務がある。しかし、ムラ社会では『お上にたてつくな』『ムラの衆に迷惑をかけた』という反心になる。

今の日本の雰囲気はそれだ。(責任回避のため)権力者がそれを利用して「一番の問題だ」

支援活動という明確な目



香田証生さんの遺体と対面した後、自宅に戻った父真澄さん(左)と母節子さん(右)一福岡県直方市で4日

的を持った4月のケースと、香田さんのケースを同じように考えるのは無理があるかもしれない。だが、共通するのは、政府のやる事が正しく、人と違う行動を取る若者を非難する風潮だ。

学生時代、アジア各国を放浪した経験を持つ、国際医療支援団体「AMDA」(本部・岡山市)の菅波茂代表(57)は「若者が冒険を求める気持ちは自然だと思ふ。そうした若者を完全に否定してしまう方が、むしろおかしな社会だ」と話す。

【粟田慎一、鶴塚健】

×

混迷を深めるイラク。そこで命を落とした一人の若者への中傷や、サマワで活動する自衛隊への関心の低さが、この国の真の姿なのか平和主義を貫く日本は、歩む方向を変えようとしているのか。イラクを通して見えた日本社会の変化を考へる。